

41805

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 41-1915 |
| 20000 67126 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

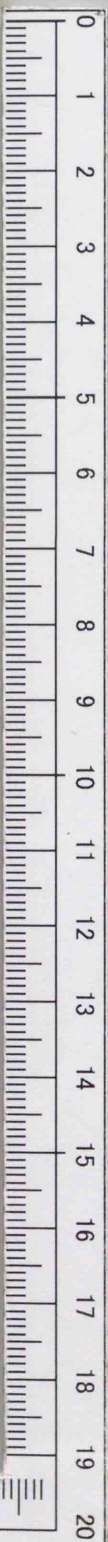
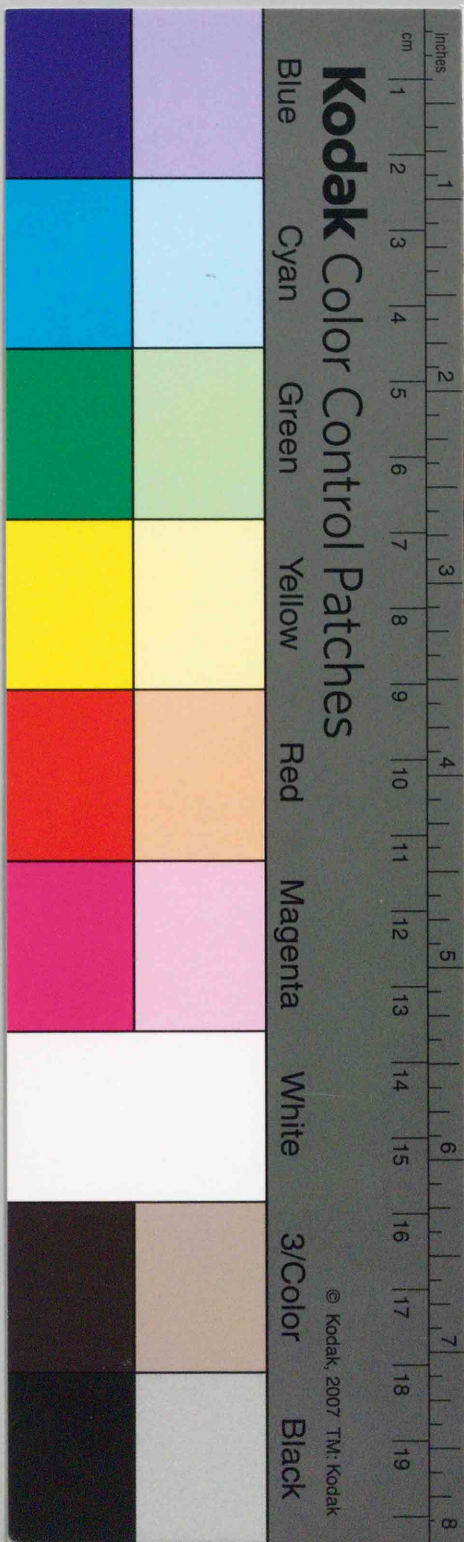


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



| |
|-----|
| 4a |
| 810 |
| K4 |

中國文教科書

修正十版

卷六



資料室

修正第十版

文部省檢定濟

大正四年一月九日 中國學校國語教科書

中國文教科書

吉田彌平編

卷六

東京 光風館藏版



42

810

大4

東京 光風館藏版
中國文教科書
吉田彌平編
卷六

中國文教科書卷六

目次

| | | | |
|---|------------|-------|----|
| 一 | 國語と愛國心 | 上田萬年 | 一頁 |
| 二 | 進學 | 室鳩巢 | 九 |
| 三 | 相模灘の落日 | 徳富蘆花 | 四 |
| 四 | 月の洞庭湖(口語文) | 佐々木信綱 | 六 |
| 五 | 月光の曲(新體詩) | 島崎藤村 | 四 |
| 六 | 空行く雁 | | 七 |
| 七 | 源九郎義經 | | 三 |
| 八 | 血氣を戒む(書牘文) | 吉田松陰 | 四 |

目次

一

中國文教科書卷六

| | | |
|---------------------|-------|-----|
| 九 膽力を養へ(口語文)..... | 嘉納治五郎 | 四 |
| 一〇 仁和寺の法師..... | 兼好法師 | 五 |
| 一一 六波羅合戦..... | | 七 |
| 一二 島の爲朝..... | 瀧澤馬琴 | 九 |
| 一三 西航記..... | 巖谷小波 | 六 |
| 一四 近郊の晩秋..... | 正岡子規 | 七 |
| 一五 如意輪堂..... | | 八 |
| 一六 四條畷懷古(新體詩)..... | 中邨秋香 | 六 |
| 一七 武士のなさけ(口語文)..... | 芳賀矢一 | 九 |
| 一八 雪前雪後..... | 幸田露伴 | 一〇 |
| 一九 友に寄す(書牘文)..... | 高山樗牛 | 一〇八 |

| | | |
|------------------|-------|----|
| 二〇 忘れ難き日..... | 姊崎嘲風 | 一五 |
| 二一 故郷の花..... | | 一〇 |
| 二二 平重盛論その一..... | 高山樗牛 | 一五 |
| 二三 平重盛論その二..... | 高山樗牛 | 一三 |
| 二四 皇國の姿(短歌)..... | | 一六 |
| 二五 經筵進講録..... | 元田永孚 | 一六 |

中國文教科書卷六目次終

中國文教科書卷六

一 國語と愛國心

上田萬年

上田萬年
文學博士。
東京帝國大學
文科大學長。
(一九三〇)

我が日本國は一家族の發達して一人民となり、一人
民の發達して一國民となりしものにて、神別・皇別・蕃
別の名ありといへども、今日にては、總て此等の種別
は全く融合同化し去られたり。是實に我が國家の
強みにして、一朝事ある秋に當りて、我々日本國民が
協同の運動をなし得るは、主としてその忠君愛國の

大和魂と、この一國一様の言語とをもてる大和民族あるによりてなり。故に日本國民の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の歴史と共に一步もその方向より誤り退かしめざるやう勉めざるべからず。かく勉めざるものは日本國を愛する仁者にあらず、又日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

凡そ一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ、或は考ふる總ての事は、皆その言

語に反射し出づるものなり。故に「言語は、その話す人の精神の上に生活する思想及び感情が、外に出てて化身したるものなり」といふも、決して不可なきなり。試に支那語を見よ、いかに仁義の道が彼等の間に行はれしかは、歴史を待たずして言語の上に明かなり。文人國に詩歌の語多く發達し、武人國に武人の語多く繁昌す。英語の商業に於ける、佛語の社交に於ける、獨逸語の理論に於ける、皆それごとく、その人民の長所によりて發達したるものなり。言語は之を話す人民にとりては、恰もその血液が肉

體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を日本の語にて譬へていはゞ、日本人の精神的血液なりと謂ひつべし。日本の國體はこの精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はこの最も強かるべく、最も永く保存せらるべき鎖のために散亂せざるなり。故に大難の一度來るや、この聲の響くかぎり、六千萬の同胞はいつにても耳を傾くるなり、何處までも赴きて飽くまでも助くるなり、死ぬるまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、千島の奥も臺灣のはても、一齊に君が八千代を

壽ぎ奉るなり。

かくの如く言語は國體の標識となるのみにあらず、之と同時に又一種の教育者、所謂情深き母にてもあるなり。我々が生るゝやいなや、この母は我々をその膝の上に迎へ取り、懇にこの國民的思考力とこの國民的感動力とを教へ込みくるゝなり。されば、この母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。

言語の上には、我々が心中に一日も忘れかぬる生活、

ことに人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念が結びつき居るものと知るべし。我々が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果て、すやくと眠に就かんとせしをり、母君はいかに優しき聲にて寢よとの歌を謳ひ給ひしか。頑是なき子供心に、わるふざけなどして打廻りし時、厳しき父君はいかに嚴かに教訓を垂れ給ひしか。さては夏の日ざかりに、隣家の樹に攀ぢて蟬を捉へたる、あるは春の麗らかなる野邊に、友たちと紫雲英などを摘みあるきたる、總て當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、

何ともいはれぬ快感を我々に與ふるなり。次には小中學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ々の生活をこの上に反映す。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりには、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざる者はなかるべし。

されば國民がその國語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ずその自國語を尊び、決して之

を措きて他の外國語を尊重せず。情の上より自國語を愛し、理論の上より其の保護改良に従事し、以て眞正の國民を養成せんことを務む。

凡そいづれの國を問はず、苟も國家の觀念の上よりその一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、まづその國の言語、次にその國の歴史、この二つを蔑にしては、決してその功を收むること能はず。是國民たるもの、須臾も忘るべからざることなり。(國語のため)

二進學

室鳩巢

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を涉りなば、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、
少壯不努力、老大徒傷悲。

古詩
文選に出づ。

陶侃
晉人。陶淵明
の曾祖父。
(九一九—九九四)

るによかるべし。

それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚

遊荒廢、生無益於時、死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前

にいへる淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思は

る。凡そ人と生れて學に志ありといふきは、の、生き

て時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同

じく朽ち果てんはいと口惜しかるべきことなり。

されば諸君も此の陶侃が語をもて自ら激昂して、日

夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ふ。

とかく一生こゝを離れぬことなれば、急迫にして求

むべきにあらず。たゞ懈を戒めて常に聖賢の書に

優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余、

昔加賀にありしとき、士族の中に紹鷗・利休が風流を

慕ひて茶湯を好む者あり。江戸へ行役するとき、道

中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂

みとしけるを、同行の人見て、いかにすけばとて道中

にてはやめよかし」といへば、その人いふは、道中とて

紹鷗
織田信長が茶
道の師。
利休
千宗易。豊臣
太閤が茶道の
師。

一生の外にあらばこそ。これも一生の日數の内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後もやめざりき。學者の道に志すも、此の人の茶湯を好むが如くなるべし。
(駿臺雜話)

三 相模灘の落日

徳富蘆花

秋冬、風全く凜ぎ、天に一片の雲なき夕、逗子の海濱に立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとは思はれず。

逗子
 相模國三浦郡
 逗子町。

9

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み終るまで、三分時を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山、煙の如く淡し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、次第に紫となる。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帯ぶ。此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極、平和の至。物あり融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀といはんは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちに藍色に變ず。唯富士の巔舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに、悠々として

落ちゆく。

已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。しかも餘光の忽ち箭の如く上射し、西空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實に斯の如し。

日の落ちたる後は富士もほどなく蒼ざめ、やがて、西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き藍色となり、日の遺孽とも思はる、明星の次第に暮

れゆく相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。(自然と人生)

佐々木信綱

文學博士。

(一九三三)

岳州

支那湖南省岳州府。

四月の洞庭湖

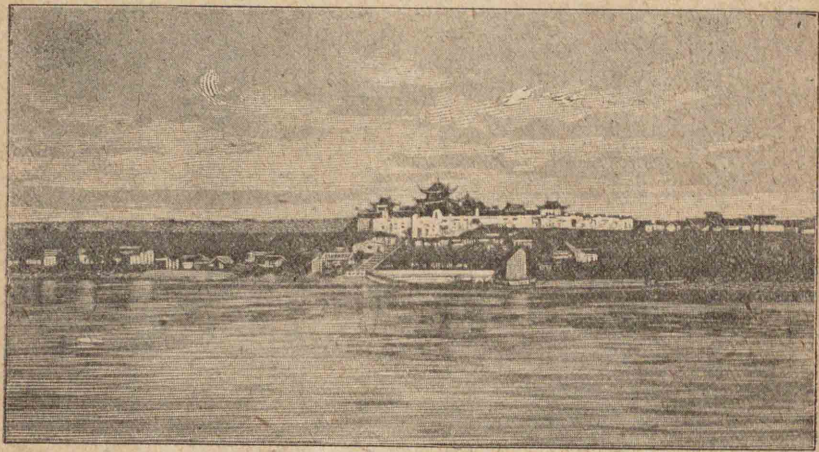
佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甍瓦は幾百年の風霜に黒ずんでゐる。建てなほしてまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。

船を捨て、上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋が

范文正公
范仲淹。宋人。
(一六四一—一七二二)
その岳陽樓記中に、「衡遠山、吞長江、浩々湯々、橫無際涯。朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。」

ある。それは蘆のまる屋とてもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その間を通りぬけて高い石段を上り、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯々洞庭湖は目の前に天地の大幅を廣げてをる。湖の門戸には彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、何れも江の島位の大きさの島で、さなが



岳陽樓(真寫)

ら洞庭宮を守る獅子狛犬の如くである。今や夕日は其の真中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めて居たが、促し立てられて船に歸つた。幸に風は追手。帆を張つて愈洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見るく紅の眞玉が湖心

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
煙寺晚鐘
漁村夕陽

に沈む。顧みれば岳州府城の上に月は昇る。さながら、洞庭八百里、月照岳陽城といふ詩のとほりである。日を數ふれば恰も舊曆十月十五日の夜で、かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫しがたく麗しい中を、遙に一帆又一帆。風のまにく、遠く、近く、且顯れ、且消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖

皓月千里

岳陽樓記中の句。

卓彦恭
宋人傳聞く。

の底深く沈んだならばと思はれる。
 美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。
 月は愈澄み上る。見えるものは唯黄金・白銀の波。
 「皓月千里、浮光躍金」といふ有様である。廣い果知らぬ湖の上、進み行く我が船の近くに二三の釣舟が居る。昔、卓彦恭が洞庭を過ぎた時、月下に釣せる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や」と問うたに、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある。」卓喜んで、「願はくは一篇を聞かん。」老人柁を鼓ちて、「八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空。」世間多少乗除事、良夜月明收釣筒。」と高吟

し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟は、たしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。
 月は良く、風は追手。船は帆腹飽満、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月はいよく澄む。此の意人の識るなし。いひしらぬ楽しさ、寂しさ、何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身をいるに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一昨年、初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月、かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあは

れて、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。
(帝國文學)

五 月光の曲

島崎藤村

都の塵はかゝるとも、
市の響はかよふとも、
さながら月に照されて
鏡にまがふ池のおも。

まがふ池のおも

さざれ波立ち池水の

動ける方を眺むれば、

鏡の中に水鳥の

むらがり遊ぶ影の見ゆ。

人の世はげにとゞまらで、

時につけつゝ動くとも、

藝術の國の静けさは

美小地

この池の面に似たるかな。

かしこに遊ぶ水鳥は

沈むともなき誰が影ぞ。
かしこに動くさゝ波は
誰が浴みするわざならん。

たれに去るべきか

あゝ照る月は昔より
人の望むにまかせたり。
藝術の花は昔より
人の慕ふにまかせたり。

燭乗りて
晝短苦_二夜長_一
何不_二乘_レ燭
遊_一。

燭乗りてよもすがら

直理

遊ぶといふもことわりや。
藝術は長し、月清し、
この命こそ短けれ。 (藤村詩集)

六 空行く雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたま
の年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにけ
る。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに
母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何
國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、

一萬
曾我十郎祐成
の幼名。
箱王
曾我五郎時致
の幼名。

曾我殿
祐信。

工藤一藤
祐經。

鎌倉殿
源頼朝。

いざさせたまへ」といひければ、遙に忘れたる空も今更思ひ出されて、消え入るばかりなり。母泣くくのたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらん」狩場より歸りたまふ道にて、王藤一藤とやらんに射られて死にたまひぬ。」と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里

にあるを知らてや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛び行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ

悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬鞍弓矢を以て物を射ありく事の羨ましきよ。これらの事ども思ひ續くれば、いづよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるゝぞや。とて、袖に顔を差入れてさめくくと泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房之を聞きて、あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上臈たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはす

るぞ。とくく入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我

等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにも
 ならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をか
 くの如く差合ひ、射取りて後には、ともかくもなりな
 ん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓
 矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も
 打領きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひ
 けり。(曾我物語)

中村孝也
(三四五)

七 源九郎義經

中村孝也

源九郎義經。 あはれ此の文字の何ぞ詩趣に富める

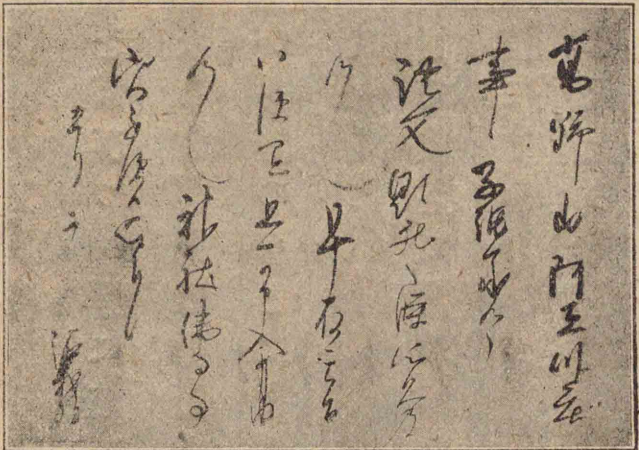
や。

初夏の夕、潺湲たる水のほとりに立ちて、隈なき清光
 を浴びつゝ、靜に彼の名を口ずさみ見よ。眉目秀麗
 なる御曹司は髣髴として立現れ、羅の袂を靡かせな
 がら籬のもとに寄り添ひて、横笛ぬき出で、歌口うち
 しめしつゝ、心ゆくばかり吹きやすまさん。劉曉と
 して虚空に漂ふ妙なる調に、月は恍然として松の下
 枝にやすらひつ。さらばと徐に歩を運べば、滿地の
 露天上の光を宿して、さながら珠玉を踏むこゝちす。
 折からの靜夜に、長橋人の影も見えねば、誰を憚るよ

七 源九郎義經

筆蹟

九郎御曹司殿
御文。高野山
阿豆川庄事、
子細承候了。
證文顯然之餘
所見及一候也
早存其旨以
便宜且可申
入事由一候也
神社佛寺事、
既不便候。恐
々謹言。
五月二日。
源義經。



源義經筆蹟 (高野山寶簡集)

しもなく、吹くや笛竹悠々として心耳を澄す妙音に
憧れつゝ、われとはなしに渡
りゆくその後へより何もの
の狡兒が惡戯ぞ、えいやの掛
聲もろともに忽ちひらめく
長刀の光。欄干高く躍りざ
まにはつしと抑へて動きも
やらせぬ紅の扇。鴨川の水
は覺えず讚歎の聲を揚げて、
その勇壯に和すとぞ見えし。優なるかな、一管の玉

鞍馬の谷

山城國愛宕郡
鞍馬山僧正
谷。

鏡の宿

近江國鏡山の
北にありし古
驛。

黄瀬川

駿河國にあ
り。頼朝義經
對面の陣址は
川の東岸に位
す。

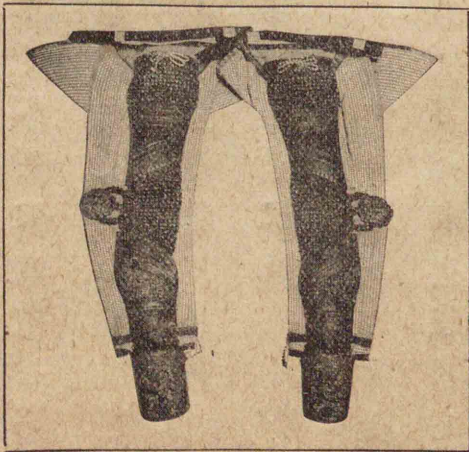
笛幽韻を傳へて、風流今もなほ馨しきを覺ゆ。
凡そ彼の名の現るゝところ、美しき色彩は彼を包ん
で常に詩中の人たらしむ。鞍馬の谷には、杉の木立
彼が木劍の名残をとゞめ、鏡の宿には、假の宿り彼が
元服の物語を残す。紅顔の御曹司、奥州平泉の館に
燈を挑げて、韜略を繙きし春の思やいかに。治承の
木枯に驚かさされ、住み馴れし里を立出て、黄瀬川の驛
に兄頼朝と相見し宵の涙やいかに。宇治川の戦に
贏ちえし初陣の功名を、早馬走せて鎌倉に告げなが
ら、忽ち鶴越の險を踏み破つて、一の谷なる敵を追ひ

落し、更に又暗々たる眞夜中に纜を解いて風波の海を押し渡り、屋島に火を放つては敵の心膽を奪ひ、壇の浦に戦つてはさしも榮華に誇りたる平家の一門を底の藻屑と消えしむるに至つて、彼の生涯が達し得たる高潮のいかばかり洋々たるものなりしぞ。誰か思はん、ついで来るものは哀々たる腰越の愁訴、腥風慘たる堀川館の夜討、さては大物が浦の難船となり、吉野山雪中の別離となり、山伏姿に身を窶して安宅の關に行き悩み、笈を解きし奥州の山河風光依稀としてありし昔のまゝなれど、人の心はうつろひゆ

腰越 相模國鎌倉の西一里にあり。堀川館の夜討 士佐坊昌俊頼朝の命により、義経を京都六條堀川の館に襲ふ。

Kanamura

き、流離の果に敢なく持佛堂を紅に染めて、衣川の水に千載の恨をとゞめんとは。春秋あづかに三十一歳かゝる短き生涯に盛衰榮枯あらゆる人生の相を現じて、花と開き花と散りにし物語に、ものゝ哀を汲みても見よや。神韻縹緲としてさながらの詩なり、畫なり、演劇なり。されば我等は彼の名を憶ふ毎に、彼が體現するロマンティックなる一生の間に、深甚無量なる感興の



(藏社神日春)手籠の用着經義源

清泉を掬ばざることをなし。

彼は我が國二千五百年の歴史の舞臺に往來せる無数の英雄の中にありて、最も多く國民に愛敬せらるる一人なり。國民は實に彼を愛して措く能はざるなり。彼は所謂勤王家にあらず、愛國家にあらず、立法家にあらず、政治家にあらず、豫言者にあらず、救世主にあらず。而して時としては正成よりも、時宗よりも、廣元よりも、頼朝よりも、法然・親鸞・日蓮よりも一層の愛敬と同情とを寄せらる。彼は國民の先頭に立ちて指導することなく、號令することなく、鞭撻す

武之道

波瀾重疊し
しむる能はざらしむ

ナヨウヨウ

ることなく、抑制することなく、彼は國民の爲に何ものをも建設せず、組織せず、物質界に於て福利を寄與することなく、精神界に於て道念を鼓吹することなく、彼は唯一個の人として刻々うつろひゆく現在に活動せるのみ、國民の眼前に於て花々しき活劇を演じたるのみ。しかもその波瀾重疊して榮枯窮りなき生涯は、咲くと見えて散りゆく三春の花に無限の哀傷を催す多感なる國民をして、彼の爲に萬斛の涕涙をとむる能はざらしむ。彼は毫も國民と時代とを超越することなくして、却て全く

その間に生存したりしが故に、國民は仰いで追隨すべき豫言者の姿を彼の中に見ることなく、却てわが側に我と共に進行しつゝある彼を認むるなり。我等の多くと同一なる空氣を呼吸し、同一なる感情を有し、殊に權勢に反抗して獨往邁進し、自ら自己の王國を開拓せんとして一向精進の態度を失はず、輕快敏慧颯然として松の梢に落つる天風の趣あるところ、まさに我等の好尚を満足せしめて餘りあるを覺ゆ。我等と共に飲み、共に食ひ、共に語り、共に歌ひ、我等の進軍と歩調を合せて進み行く一員は、即ち是、我

等にとりては親愛なる友人にあらずして何ぞや。彼は我等の友人なり、故に我等は彼を愛して措く能はざるなり。(源九郎義經)

八 血氣を戒む

吉田松陰

平時喋々臨事必啞
平時笑々臨事必滅
孟子助長の害を論
をばを見つべし
八十送行の時諸友拔劍の事あり此の頃
また暢夫が江戸に在つて斬ぐれ事あり
を聞くと是等の事あり諸友氣魄衰萎

八 血氣を戒む

吉田松陰
名は矩方
長州藩の志士
(一八一八—一八六〇)
八十
佐世八十郎
前原一誠の
名
暢夫
高杉晋作、宇
は暢夫。

の程を知らば、僕今死生全く念頭に
 絶えぬ自ら信を断頭場に登り候けり
 血色散て諸氏の下にあらずと然れども
 平時は大抵用事此外一言せむ一言すは
 時を必を温然たる和氣婦人少女の如し
 是柔魄の源なり慎言謹行なすべし
 大氣魄は出づるものにあらず張良鐵椎
 當時の面目を想ひ見はづし僕去月二
 十五日より一齋の肉一滴の酒をたぐはれ

張良
 漢の高祖の謀
 臣。博浪沙中
 に於て秦の始
 皇に鐵椎を擲
 つ。

鐵椎

頭

久阪
 久阪義助、名
 は通武。松陰
 の妹婿。
 (二四九—二五三)

だよ柔魄を増ふこと大なり僕已に諸友
 に絶つ諸友亦僕に絶つ然れども平生
 の友誼のため區々一言を發も是僕が鑿
 空の語にあらず聖賢傳心の教なれば
 輕視をふことなけれ
 血氣尤も是事を害す暴怒亦是事を害す
 血氣暴怒を粉飾をふその害更に甚だし
 中谷久坂高杉等に傳へよ一たぐ候

(吉田松陰傳)

嘉納治五郎

東京高等師範
學校長。
(二三〇)

九 膽力を養へ

嘉納治五郎

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入して従容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き來り、危岩頭上に崩れかゝるとも、悠然として身を持することが出来る。膽力のないものは、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し、色を失ふやうなことになるものである。膽力は天稟に之を有して居るものも少なからぬことであるが、又決して修養し得られぬものではない。

ネルソン
英國の海軍提
督。
(1758—1805)

上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潜伏しながら安眠して居つたとか、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つたとか、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたとかいふが如きは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。

昔武田信玄の部下に岩間大藏左衛門といふ武士があつた。其の容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、其の性質は至つて卑怯であつ

た。信玄が之を實戦にためしてみたのに、七たび進んで七たび退いた。信玄は「これではとても普通の方法で教誨激勵することは出来ない」と思つて、或日又戦争の始つた時、大藏左衛門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一步も身動きの出来ないやりにした。矢丸は雨のやりに飛んで来る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衛門は恐怖して殆ど死人のやりになつてしまつた。併し其の戦争のしまひまで、幸に矢丸に中らなかつた。そこで大藏左衛門は翻然として悟る所あり、運命さへあれば、雨

のやりに下る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと知り、爾後は戦争毎に勇を振つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。

之を見ても、あきらめるといふ心の持方の膽力養成に必要である事がわかる。吾人が危険災害等の場合に於て、成るべく安全に之を避けようとするのは自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に却て怯懦に陥る事があるのである。其の最も悪い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍

勝負をするといふ場合に、敵刃を逃れようと命を惜んで
 はならない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切ら
 せて敵の命を奪へ」といふやうに死に身になつて、其の上
 に吾が手段と伎倆とを盡す方が、命を惜む者よりは自由が
 きくから、自然と數倍のはたらきをする事が出来る。強ひ
 て危害を避けようとすると、煩悶し、疑惧し、狼狽して、
 自械自縛するので、十分の伎倆も六七分にしかはたらかず、
 却て不結果に陥るのである。あきらめるといふ心の持方の
 練習のある者は、危害が身に迫つたときにも、此の際に狼

②

あきらめるといふ心
の練習

狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯
 一つのみ」とあきらめ、其の方法に全力を盡して、さて
 敗れたならばそれまでの事と、覺悟を極めてかゝる
 から、別に惶惑するやうなことはない。

落膽喪神は、或場合には其の危険の結果を豫想した
 後ではなくして、衝動的に直接の瞬間に起つて來る
 ことがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止
 し難き勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に
 何か良い工夫はないであらうか。

雲居和尚といふのは、伊達政宗に招かれて松島の瑞

②

精神のあきらめ
の練習

ウシ

巖寺に住んで居つた名僧であるが、毎夜雄島の石窟に往つて坐禪するのを常として居つた。或時一少年が其の悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隠れ、雲居が下に來た所を、手を延して頭をぐつと攫んだ。雲居は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、其の少年は雲居に向ひ、近ごろ淋しい處で、怪物に出會つたことはなかつたか。と問うたら、雲居は之に答へて、いや別に何も見たことはない。五六日前、闇の中で自分の頭を攫んだものがあつたが、其の手に暖みがあつたから、子

禪
程居

供
すり

供らの惡戯だと思つた。といつたといふことである。此の雲居の沈勇は如何にして養はれたものであるか、定めて心膽を練つた結果であらう。しかし、かゝる場合に處すべき簡單なる一法として、此に少年者に告ぐべき事がある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として古來經驗の上から有効と認められて居るものである。世に、理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して、石塔の蔭から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷すや

うなものである。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛び出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判断がつき易くなるのである。衝動的に起る恐怖心を去るのも、畢竟鍛錬の功を待つ外はないのであるが、吾人は年少の人に、まづ其の手始の一法として、此の事を勧めるのである。さうして終には種々の工夫を凝して、天地の顛倒するやうな大急變にも、泰然自若として我を失はない様な剛膽な人とならんことを望むのである。 (青年修養訓)

兼好法師

吉田氏

鎌倉室町時代の文學者。

(西暦一三〇二—一三九一)

仁和寺

京都市の西北郊御室にあり。眞言宗。

石清水

男山八幡。

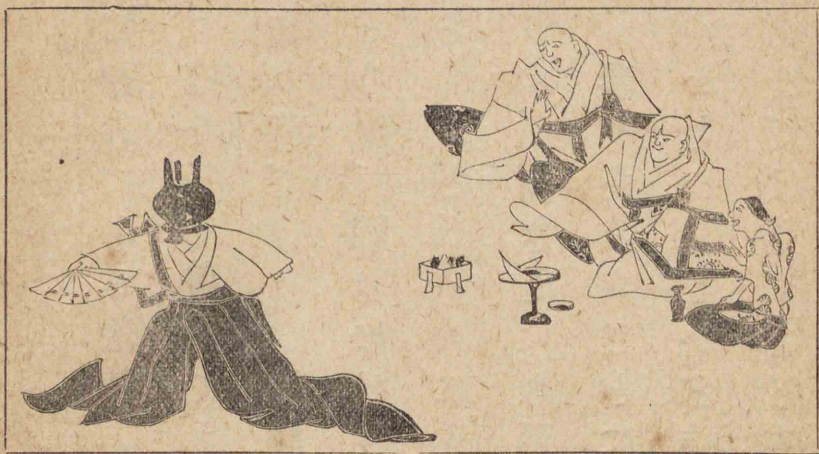
極樂寺・高良

共に男山の麓にある社寺。

一〇 仁和寺の法師

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず。とぞ言ひける。少しの事にも、先達は



浮田一蕙筆(華國)

あらまほしきことなり。
 これも仁和寺の法師、わらは
 の法師にならんとする名残
 とて、各遊ぶ事ありけるに、醉
 ひて輿に入るあまり、傍なる
 足鼎を取りて頭にかづきた
 れば、つまるやうにするを、鼻
 をおしひらめて、顔を入れて
 舞ひ出でたるに、満座輿に入
 ること限なし。

しばし奏でて後、抜かんとするに大かた抜かれず。
 酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかく
 すれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみ
 ちて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく
 割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきや
 りなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を
 引き、杖をつかせて、京なるくすしがりゐて行きけり。
 道すがら人の怪しみ見ること限なし。醫師のもと
 にさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそはことや
 りなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞え

かゝる程に

かゝる程に

かゝる程に

ず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」
と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母
など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんと
も覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれう
すとも、命ばかりはなとか生きざらん。たゞ力を立
て、引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れ
て、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻
缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて、久し
くやみ居たりけり。 (徒然草)

一一 六波羅合戦

其の

悪源太
源義朝の長子
義平

八郎御曹司
鎮西八郎爲
朝

さる程に悪源太はその儘六波羅へ寄せらるゝに、一
人當千の兵ども眞先に進みて戦ひけり。金子十郎
家忠は保元の合戦にも爲朝の陣に駆け入り、高間三
郎兄弟を組んで撃ち、八郎御曹司の矢先を遁れて名
を揚げけるが、今度も眞先驅けて戦ひけり。矢種も
皆射盡し、弓も引折り、太刀をも打折りければ、折れ太
刀を提げて、「あはれ太刀かな。今一合戦せん。」と思ひ
て駆け廻る處に、同國の住人足立右馬允遠元馳せ來

豫備刀を
持て居る
丁敷致たい
オ前さん
家来

眞先に
賜ワレ
救せぬ

れば、これ御覽候へ足立殿太刀折りて候。御佩添候は、御恩に蒙り候はん」と申しければ、折節佩添なかりしかども、御邊が乞ふが優しきに、とて先を打たせたる郎等の太刀を取りて金子にぞ與へける。家忠大きに悦んで、又驅け入りて敵數多撃ちてけり。足立が郎等申しけるは、日ごろより御先途に立つまじきものと思召せばこそ軍のなかにて太刀を取りて人には賜はるらめ。この程は最後の御供とこそ存ぜしかども、これ程に見限られ奉りては先立ち申すに如かじ。とて既に腹を切らんと上帶を押切りけ

引の
射
あさひ
季札
支那、春秋の頃の人。吳王壽夢の季子。

れば、遠元馬より飛んで下り、汝が恨むる所尤も理なり。然れども金子が所望もだし難きに、御邊が太刀を取りつるなり。軍をするも主の爲。討死する傍輩に乞はれて與へぬ者や侍らん。漢朝の季札も徐君に劍を乞はれて惜まざとこそ承れ。暫く待て」といふ處に、敵三騎來つて足立を撃たんと驅け寄せたり。遠元眞先に進みたる武者をよつ引いてひようと射る。その矢誤たず内兜に立つて、馬より眞倒に落ちければ、残りの二騎は馬を惜んで驅けざりけり。遠元やがて走り寄りて、佩いたる太刀を引切りてお

つ取り、汝が恨むる所尤なり。太刀を取らするぞ。とて郎等に與へ、打連れてこそ又驅けけれ。悪源太宣ひけるは、今日六波羅へ寄せて、門の中へ入らざるこそくち惜しけれ。進めや者ども。とて究竟の兵五十餘騎鎧を傾けて驅け入れば、平家の士防ぎかね、はつと引いてぞ入りける。義平まづ本意を遂げぬと喜んで、をめき叫んで驅け入りたまへり。清盛は北の臺の西の妻戸に軍の下知して居給ひけるが、妻戸の扉に敵の射る矢雨の降る如くに中りければ、清盛宣ひけるは、防ぐ兵に恥ある士がなければ

こそこれまで敵は近づくらめ。いでくさらば驅けん。とて、紺の直垂に黒絲威の鎧着、黒塗の太刀を帶き、黒母衣の矢負ひ、塗籠籐の弓持ちて、黒き馬に黒鞍置かせて乗り給へり。上より下までおとなしやかに出て立たれけるが、鎧踏張り大音揚げて、寄手の大將軍は誰人ぞ。かく申すは太宰大貳清盛なり。見參せん。とて驅け出でられければ、御曹司これを聞き給ひ、悪源太義平こゝに在り。得たりやおと叫んで驅く。平家の士これを見て、筑後守父子主馬判官親子、難波、瀬尾を始として究竟の兵真先に馳せ塞が

筑後守父子
平家貞及び其の子貞能。
主馬判官
平盛國及び其の子盛俊。
難波經遠。
瀬尾兼康。

孫子
名は武、支那
周代の兵家。
子房
漢の謀臣張良
の字。

つて戦ひけり。源平互に入り亂れて爰を最後と揉み合ふたり。孫子が秘せしところ、子房が傳ふるところ、互に知る道なれば、平家の大勢陽に開きて圍まんとすれども圍まれず。陰に閉ぢて伐たんとすれども伐たれず。千變萬化して義平三方をまくりたて、面も振らず切つて廻り給ひしかども、源氏は今朝よりのつかれ武士、息をも繼がず攻め戦ふ。平家は新手を入れ替へ入れ替へ城に嬰りて馬を休め、驅け出て驅け出て戦ひければ、源氏終に打負けて門より外へ引退き、やがて河を馳せ渡し、河原を西へぞ引き

たりける。（平治物語）

一二島の爲朝

瀧澤馬琴

瀧澤馬琴
名は解。
江戸時代の小説家。
（二四七—二五八）

爲朝は日毎に物を送り來る島婦等にも親しくものいひ給ふ程に、彼も亦その徳を慕ひて、をりく乾れたる魚、束ねたる薪などをもて來りて、かはるぐ進らせけり。ある日一人の島婦が進らせし魚を食べ給ふに、その味甚だ美し。「こはよくも漬けたる鮓かな」と賞め給へば、島婦がいふやう、「これはわらはが漬けたるにはあらず。沖に鵜といふ鳥ありて魚を取

りて餌とするに、數多魚をとれる時は、食み殘せるを岩の狹間などへ貯へ置くに、自ら浪に洗はれ潮に浸りてかくの如し。伊豆の國人はこれを鴈鮓といふよしなれど、いと稀なる物にて侍り」といふ。

爲朝事のもとを聞き給ひて、昔われ豊後國にありしとき、木綿の山邊なる紀平治といふものを訪ひけるに、猴酒をもてその日のもてなしとせられしが、今又こゝに流されてこの饋を得たり。猴酒、鴈鮓は世に山海一對の珍味と稱す。さてもわれながら口には果報ありけり」と打笑ひ給へば、島婦もいとうれしむ

日曆三月

あまのつばき
あまのつばき
あまのつばき

つゝおのが家路に歸りけり。

かくて今年もや、暮れて、明くれば保元二つの年の春も彌生のころになりつ。もとよりこの島は去年の冬さへ暖かにて、雪の降ることもなかりし程に、春は殊さら住みよかれど、葦鹿鳴く浦の苦屋に風をいたみ、岩うつ浪に夢を破られ、寢覺わびしき曉に鶴の鳴聲聞えしかば、爲朝枕を欬て給ひて、奇なるかな、この島に獸は牛・馬・猫・鼠の外はなく、鳥は雁・鴨さては尋常なる小鳥やうのもののみぞ渡り來ると思ひしに、今鳴くものは鶴にやあらん。かゝる鳥も又稀には

たがひ
たがひ

渡るにこそ」とひとりごち、やがて起き出でて見給ふに、果して一隻の鶴飄々然として飛び來り、ほとり近う下り立つとき、物の響あるに心づきて眼をとめてみそなはするに、足に附けたる黄金の牌なりければ、**泫然**として懷舊に堪へ給はず、是なん先つ年われ琉球國より得てかへり、鳥羽上皇に獻りしを又放させ給ひしと聞きたるが、われに往返する事既に三たびに及び、今又こゝに來れるは必ず深き故あらん」とひとりごち、搔寄せつゝ、彼の牌を見給へば、牌の背に墨くろく、

眠柳閑花遶水亭。仙禽再去還東溟。

逢春便覺孤霞迥。清影何時照我庭。

と寫したりしかば、打返して讀み畢り、しばし思案してのたまふやう、親兄弟はいふも更なり、妻子眷屬皆死亡して、今は爲朝を思はんもの世にはあらじと覺えしに、こは何人の筆ならん。よしその人は誰にもあれ、返しせん」とて彼の牌に水を沃ぎかけ、袖もてしかと押し給へば、文字は左に見えながら衣の上にぞうつりける。やがて禿びたる筆を取出て、又この牌に、

見
岩谷小波
名は季雄
文學者
（三書一）

いにしへのためしも思ひいつの海
ことゝふ鳥の跡を見るかな。

と書きつけ給へば、鶴は忽ち飛び揚り、往方も知らず
なりにけり。（楳弓張月）

一三 西航記

東洋諸學校小先生旅行途中
巖谷小波

余は此の度の渡航にわざと獨逸の郵船を選びぬ。
そは番に船賃の廉きためのみならず、せめては船中
にてなりとも語學の練習をなさばやと思ひたれば
なり。殊に余等の乗れるはハンブルヒ號とて、長さ

五百五十呎、幅六十呎、噸數一萬の大船、さきには大西
洋通ひなりしを、この頃東洋に廻りしものとぞ。さ
ながら一大ホテルの海に浮びたらん様なり。かく
ては玄海も黒潮も何の恐るゝものかはと。

秋高く、舶大に、海靜かなり。

吳淞は揚子江の流をうけて聞きしにまさる濁江な
り。船は一夜を此の沖合にあかし、次の朝水先案内
の來るを待ちて、始めて吳淞の江に入りぬ。さるに
風横さまに來りて、濁浪やゝもすれば甲板を汚さん
とし、人は大方船室にこもりて、何れも眉を顰めざる

はなかりき。

上海及び香港にて、しをらしきは草花賣、いかめしきは印度人の巡査、やかましきは芝居の囃子、うるさきは支那人の車夫、美しきは店々の金看板、さて羨ましきは道路の修繕の行届ける、余等東京に住み馴れし者には殊にしか覺ゆるぞかし。

香港は上海に比して狭けれど、きたなからず。打見たるさま歐七支三の景色なり。されどもとより水近く山迫りたれば、町の過半は坂路にて、その邊は例の轎を行るに、轎苦力の力強くて、何程行くとも決して息を入るゝことなし。

ピークはこの地の名所なれば、例の電車にて五分ばかりに上るに、全港の景色さながら活けるパノラマなり。をりから空晴れて港内鏡の如く、これにかゝれる船の數々、さしもの余等が一萬噸も、こゝからはほんのおもちや船なり。

晝は海岸の清風樓に、夜は山手の領事が館に、二度とも日本料理に舌鼓打ちて大いに腹の蟲を慰めたれど、憾むらくは遂に湯に入ることかなはず。秋とはいへど七八月頃の陽氣を、一日歩いて汗に染みなが

ら、そのまゝ、船に歸る氣味のあるさ。
香港を出でてシンガポールに近く、恰も舊曆の十三
夜に會へり。曩に國を出づる時、知十子余に饑する
に、

知十
岡野知十。
伊人。

後の月はジャガタラ芋や御船中。

の句を以てせられぬ。この夜舷頭に立ちてそゞろ
にその句の忍び出でられしかば、今はたそを鸚鵡返
しに、

後の月ジャワ、スマトラも見えんとす。

これも月明の夜の事なりき、上海より乗れる下等船

ゴトヤ

客の、今朝船中にみまかりぬとてこれを水葬す。折
しも海上一面黄金をとかして、故らに死者が往生を
迎ふるものゝ如し。

命二つあらば身投げん、月の海。

といへる去來の句をおもふ。

松の月、竹の月、さて梅花の月などはとりとゞ、歌に入
りたるが、これはシンガポールの海邊なる椰子の梢
にかゝれる月も亦一入の眺ぞかし。

コロomboは思ひしよりもよき處なり。人と家との
きたなきにかはりて、自然の景の麗しきはシンガポ

去來
芭蕉の門人。
向井氏。
(三三—三三四)

ールの及ぶ所にあらず。殊に池沼森林に富めるは一入景を助くと見ゆ。榕樹の枝根のをかしきを見て、

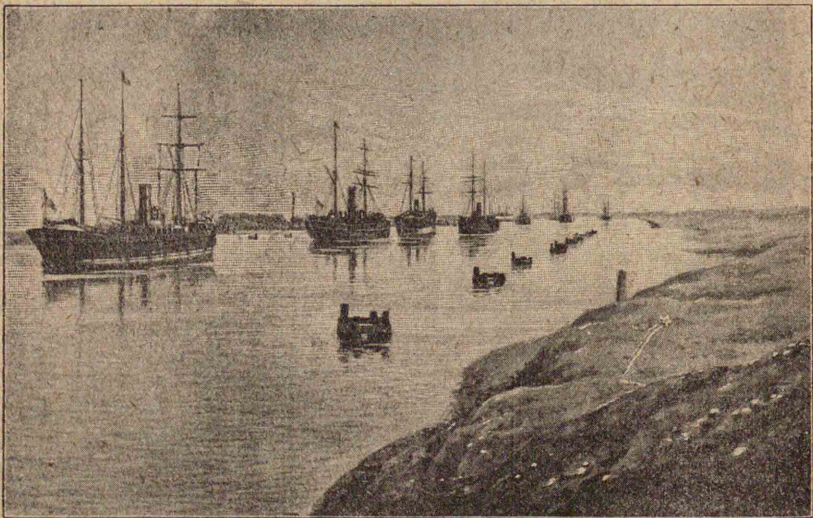
木によりて章魚を求めし茂りかな。

印度洋の名物は電光に海月か。天の川のや、淡うなれるも風情ありて、夜ごとに甲板を逍遙すること多時。

天の川、こゝ赤道と十文字。

印度洋の酷暑、紅海の苦熱は日本にてさんざ驚かされたれば、用心をさくゝ怠らざりしに、印度洋も涼し

ければ紅海も思ひしほどにあらず。殊にスエズ運河近くは朝風肌にあつきて、感冒も引きかぬまじき有様、日射病マラリヤは殆ど思ひもよらざりき。スエズの運河はさすが世界の偉観なり。秋の日豊かに沙漠のあなたに沈み行



(真寫) 河 運 ズ エ ス

く。まことに沙漠の夕照は印度洋の旭日に對してこの航路の雙絶なるべし。

地中海に入りては時候とみに涼しく、まづは日本の晩秋とかはることなし。シチリヤの海峡を過ぎしは生憎まだ夜の明けぬ頃とて、瀬戸内に似たる佳景は見得ざりしが、ナポリの港に入りし時は、夕榮の空茜を染めて、ベスピオの煙名も知らぬ山の上の古城など、こゝにはじめて歐洲の風光に接したる眼のただ活畫圖に奪はるゝのみ。(洋行土産)

一四 近郊の晩秋

正岡子規

正岡子規
名は常規。
俳人。
(三三六三三三)

朝日障子にあたりて蜻蛉の影暖かなり。世の人は上野淺草團子坂とるかるめり。我も出てなんや、出でなん。病の募らば募れ。待たばとて出でらるゝ日の來るにもあらばこそ。「車呼びて來よ」といふ。やがて歸りて「車は皆出ではらひたり。遠くに雇はんや」といふ。「さまでは。今日の日和には、足ある人ぞまづ車にて出でたる」と笑ふ。一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乗る。成るべく靜に挽かせて鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫

千住

東京市の東北

谷中・飛鳥

共に東京市の

東北なる一帯

の低き岡。

天王寺

谷中の奥にあ

る寺。

我が故郷

伊豫の松山。

の小さき花の名も知らぬが、まづ眼につく。
 空忽ち開く。村々の木立遠近に連りて、右には千住
 の煙突四つ五つ黒き煙を漲らせ、左は谷中・飛鳥の岡
 續きに天王寺の塔聳えたり。見渡すかぎり黛ほど
 の山もなければ、平地の眺の廣さ、我が國にては是程
 の處外にはあらじと覺ゆ。胸開き、氣伸ぶ。
 田は半ば刈らずあり。刈りたるは皆田の縁に竹を
 組み、てそれに懸けたり。我が故郷にては稻のみの
 る頃は田の面乾きて水をければ、刈穂は悉く地干に
 するなり。此の邊の百姓はおとし水の味を知らざ

るなるべし。我には此の掛稻がいと珍しく感ぜら
 る。榛の木にかけたるは殊に趣あり。其の上より
 森の梢、塔の九輪など見えたるは、更に面白し。
 道の邊に咲けるは蓼の花、最も多き。其の紅の色
 の老いてはげかゝりたる中に、處々野菊の咲きまじ
 れる様、ふるひつくばかり嬉し。
 我が車の響に野川の水のちらくくと動くは、目高の
 群の驚きて逃ぐるなり、あないとほし。目高を見る
 は野遊のめあての一つなるを、なべての人は目高あ
 りとも知らず、過ぐめり。世に愛でられぬを思ふに

つけて、いよくいとほしさを優るなる。
 小鮒にやあらん、すばやく逃げ隠れたる、憎し。たま
 たまに蛭の浮きたるは、無くもがな。
 むかふより人力車來れり。見れば、男一人乗りて前
 に藁苞を置きたる、その端より黄なる實の漏れて見
 ゆるは蜜柑か、金柑か。一足、町を離るれば、見るもの
 皆雅なり。
 柿の樹に柿の残りたるはあちこちにある。一つ食
 ひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに残りたるを
 見ず。

諏訪神社
東京市の西北
 郊、日暮里村
 にあり。

霜月
正平二年。

阿部野

目高多き小川を過ぐ。
 童二人とある門の内より「人力々々」とわめく。
 諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き、風俄に寒くな
 りたれば、興盡きて歸る。(ほととぎす)

一五 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋
 よりせき落されて流る、兵五百餘人、かひなき命を
 楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の
 霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざ

兩度の合戦
譽田林の戦及
び阿部野の
戦。

りけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへ
させて身を温め、薬を與へて創を療せしむ。かくの
如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具
失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。
されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後心
を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、臆
て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしけ
る。

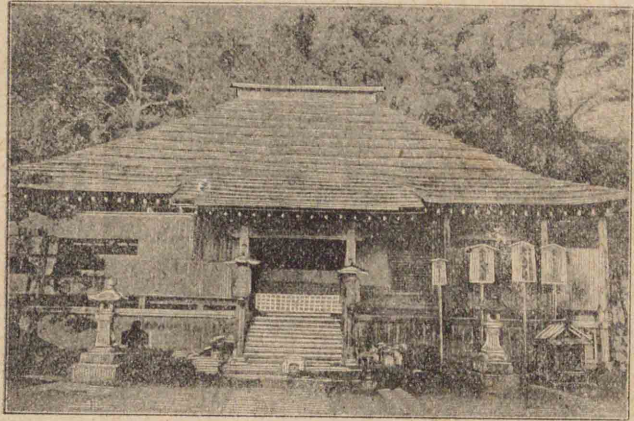
さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内
多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げ

將軍
足利尊氏。
左兵衛督
足利直義。

ければ、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが
如し。今は末々の源氏、國々の催し勢などを向け
ては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直越
後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中國・東山・東海二十
餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木
帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉
野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、
「父正成、尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟
を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西

討死
延元元年五月
十七日。



(真寫) 堂 輪 意 如

し置きて死にて候。

國より攻め上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕候ひ了ぬ。その時、正行十一歳に罷成り候ひしを、合戦の場へは伴はて、河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即けまゐらせよ。と申然るに正行、正時已に壯年に及

我が父我
の身
死の身

び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦を仕候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふにまかせぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直、師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、其の二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候と申しも

あへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心其の氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざるさきに、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきに

あらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地に附け、とかくの敕答に及ばず、只之を最期の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足を引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名

たつたもろを
よみてあふ本

生きたらぬ
もろむらふ
こころ

やうしん

字を過去帳に書きつらねて、その奥に、
かへらじとかねて思へば、梓弓

なき數にいる名をぞとむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢髮
を切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて敵
陣へとぞ向ひける。(太平記)

一六 四條畷

中邨 秋香

秋篠や外山おろしの末氷る

正月五日の朝まだき、

正月
正平三年。

飯盛尾崎の野に山に

みち溢れたる稻麻の兵。

陽には備へて鳥翼を張り、

陰には潜みて魚鱗を疊み、

寄手おそしと待ちかけぬ。

春の日數もまだ淺みどり

立ちも隠さぬ霞を分けて、

先陣後陣の二手に分れ、

必死をきはめし三千騎。

潮を捲きて押寄する
白旗一揆を一まくり
嵐の花とかけちらし、
雲霞の如き敵軍めがけて
たゞちにすゝむ菊水の旗。
旌旗東西に入りまじり、
汗馬南北に馳せちがひ、
追つつ返しつ、開きつ卷きつ、
彼方は變じて蟠龍を結べば、

此方は化して逸虎とわかれ、
鎬をけづる三十餘合。

過去帳連署の一百餘騎、
電光石火と薙ぎたつる
獅子奮迅の太刀風に
争ひかねし北あらし。
一陣破れ、二陣潰え、
三陣・四陣もまた頽れ、
大浪かへして亂るゝ敵軍。

めざす敵に近づきぬ。
 すは年來の本懐を
 今ぞ遂げんとみけむかふ
 あはれこはそも何事ぞ。
 花とまがひて散り懸る
 梢の雪のたゆたひに
 望も絶ゆる道しばの
 露と碎けし玉の緒よ。

春風ぬるき四條畷、
 昔を問へば秋篠や
 外山の峰は霞めども、
 社の梅はかをれども。

（不盡廼舍遺稿）

芳賀矢一

文學博士。
東京帝國大學
文科大學教
授。
（二三七）

一七 武士のなさけ

芳賀矢一

日本の武士は文武二道をかけて嗜があるのを最上の理想とした。上代の荒魂和魂の思想は即ち是である。すべて物のあはれを知ることが本當の武士である。義理といひ、慈悲といふのがこの精神であ

る。熊谷直實が

取つて押へて首を搔かんとて、兜をおしあふのけて見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほどして十六七ばかんなるが、容顔まことに美麗なり。

を見て、敦盛を宥さうとしたのが其の本色である。

これも出来難かつた爲に、無常を悟つて法然上人の弟子となつたことが、武士として如何にも優にやさしい事と感心するのである。吉野拾遺の楠木正行が辨内侍を亂暴人の手から奪ひ返した話、しかも其

法然上人
名は源空。淨
土宗の開祖。
(一〇三一—一七三)

とても世に
とても世にな
がらふべくも
あらぬ身の、
かりの契をい
かて結ばん。

の女を賜はるといふ敕命があつたとき、とても世にながらふべくもあらぬ身の「の歌でこれを辭したといふことは、その行爲、その文雅、武士の標本といふべきものである。

仇敵までなつくといふのが眞の武士で、同じく吉野拾遺の熊王が、正儀を仇とねらつて、つひにその高義に感じて討たれなかつたといふ話は、安倍宗任が義家に降つて遂に感化されたといふ話と同一轍である。武士は敵をもなつけるといふなさが無ければならぬ。武士は主君に對しての眞心と同時に、敵

に對してのなさを持たねばならぬ。楠木正行が瓜生野の戦に、敵の溺卒五百餘人を助けて、醫藥を給して勞つたことがある。これは日本に於ける赤十字事業として著しいものである。はじめ日本が赤十字社に加入しようとした時は、外人は例のとほり日本を野蠻視して居つたから、日本にも昔から赤十字の様な事業をやつた事があるかと問合せに來た。其の時、この例を以て答へたので、これがために赤十字社の加入が出來たといふ事である。日清・北清・日露等の事件に、日本赤十字社のなした事業は著名な

平維茂
鎮守府將軍平
繁盛の孫にし
て、貞盛の養
子。餘五將軍
と稱す。

事實であつて、今では西洋諸國でも日本の赤十字社の目ざましい活動を認めて居る。日本人には古くからこの考があつたのである。今昔物語の「平維茂罰藤原師任語」に、餘五將軍が、
屋共に火皆つけて、凡そ女をば上下手を懸けそ。
男と云はん者をば、見えんに隨つて射伏せよ。
といつた話があるが、之を見ても、女子の様な抵抗力の無いものには、全く武力を加へぬといふ武士のなさがわかる。
日本人は、上代には山の幸で、兎や鹿の肉、いはゆる毛

の荒物を食用にした事はあるけれども、家畜の肉を食つた事は無かつた。後世になつて、佛教の影響から全く肉食を禁じて以來は、尙更の事である。自分の家に飼つたものを殺して食ふことは、日本人の忍びぬ所である。今日でも、自分の家の雞をしめ殺して心持よく食ふ人は至つて少ないと思ふ。鰻屋の主人が目を病むとか、鳥屋の息子が鳥肌に生れたとかいふやうな話は、強ち佛教からの迷信ではない、日本人の本性から來た話である。日本に牧畜業の發達せぬのもこれが爲である。此の仁慈心は理窟か

ら言へば論にはならぬが、そこが人のなさけてある。

君子遠庖厨
君子之於禽獸也、見其生、不レ忍、見其死、不レ忍、聞其聲、不レ忍、食其肉、是以君子遠レ庖厨。
 窮鳥
窮鳥入レ懷、仁人所レ憫。

「君子遠庖厨」といふ語もこの事である。「惻隱之心、仁之端也」とも孟子はいつて居る。「窮鳥懷に入れば、獵夫もこれを殺さず」といふのも、支那の語ではあるが、事實は日本に廣く行はれて居る。

日本では昔から禽獸に對して毫も虐待をした例證はない。農夫が牛や馬をいたはる事は一通りでない。軍馬に徵發された馬に對して涙を吞んで別れた話はいくらか聞いた。鹽原多助の實例は現在いくらかあるのである。

畠山
畠山重忠。

畠山は赤威の鎧に、護田鳥の毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛の太く逞しきに乗つたりけり。此の馬、鞭打に三日月程なる月影のありければ、名を得たり。壇の上にて馬より下り、さしのぞいて申しけるは、爰は大事の悪所、馬轉ばしては悪しかるべし。親にかゝる時、子にかゝる折といふ事あり。今日は馬を勞らんとて、手綱、腹帶より合せて、七寸に餘りて大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負ひて、椎の木の手だち一本ねぢ切り杖につき、岩のはざまをしづくところ下りけれ。(中略)

畠山は、此の崖岩に馬損じては不便なり。日比は汝にかゝりき。今日は汝をはぐくまんといひける、情深しと覺えたり。

武士のなさは馬にも及ぶのである。神前の馬はいふに及ばず、八幡の鳩、稻荷の狐、山王の猿、春日の鹿、天地自然に親しむ我が國民は禽獸を愛しこそすれ、決して虐待はせぬのである。(國民性十論)

一八 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霽も天より降るものゝ面白

からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ちらく／＼と降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑かに融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら／＼と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく軽らかに降りて、

落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消ゆる／＼も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松梅縦なんどの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからぬば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻

花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲をあざむき、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで層樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして廣きは却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪

廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに、面白くおもはる。馬をさへ眺むると人の云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。

西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水皆畫とすべ

馬をさへ眺むる雪のあしたかな。(芭蕉)

山王臺・溜池
山王臺は麴町區に在り、日枝神社を祀る。溜池は其の東南麓にありしが、今は埋められて宅地となる。

し。 姆尾横尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。 木曾の
寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷に峙ち、潭は藍
靛を湛へて一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさ
に、翠蓋梢重く、璧の簪を戴ける松の村立のあたり、姿
をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるな
んど、二十年の昔の余の胸に猶あざやかなり。
東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安け
く、雪に閑かなる大御代の午、また比無くめでたし。
山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔いたづらに
なつかし。 不忍の池一望千頃の景はいはずもあれ、

待乳山
隅田川の右岸
淺草公園に近
き小丘。

相生橋
深川區越中島
より京橋區新
佃島に架した
る橋。
中島
深川區越中島
の一名。

石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、
敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て
難き風情あり。 暮れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何
をか物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲
に白さ有りとかや云ふべき。 隅田川は待乳山を望み
たるも好し。 山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。
一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川を
りと稱ふべし。 相生橋の橋長く、中島の島小なる、取
出でて言ふべきにはあらぬども、南に涯無き海をす
かして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を

展べ樹立の鷺を宿したるに割りて一幅の畫とした
る、欣ぶ可く、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見
どころとすべけれ。(洗心録)

一九 友に寄す

高山樗牛

如何所暮し、あそまひや此方おるらす
碌々 羅在の間餘事なうう所安心下さ
ねたふ此頃を事に終れ此と無沙汰り
打過ぎひ毎度勝手の事のみ御頼と

申上げは面倒家入候徒然の折に
物ほきまゝ色々 誼文中とひども 實
際手にとるは稀に、は産ひ水彩畫して
描きみんご先頃繪具など取寄せひ
ども是も是も手に觸まひ願ふは我な
らば、控へても暮らさうと、思ふは
つとそそわらうと、なつかしき樂しき
申候

魚見崎
熱海町の南
端なる岬。
真鶴崎
相模國足柄下
郡にある岬。

ハイネ
獨逸の詩人。
(1797-1856)

小生の室は熱海中より最も眺望よき處
より魚見崎より真鶴崎まで雙眸の裏
に草子の朝日影をく入る頃よ起き出で
九時頃より濱を散歩致し午後は
圍碁大う碁に費すが毎これ例より時ふ
ち一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
に仰臥し大海の浩蕩を對して朗吟する
ことも亦存の或は日暮の空ひとり磯邊の

松に腰おちて夢ともなく現ともなき思
に耽ることもこれあり休げよや自然の無盡
藏なる今は大驚かすなうりに亦存は
我も人そ自然のこころは言へず人
か其の真意を會得するや天の郷地の
響思ひ見るたよ高く深く休へともそ其感
ずる人の心は如何ばかり高く深きその候
べきやうく夕日影も名残なく暮ま果て

渙火ほの見ゆる頃ふ相成候てばせんぞくくの
 波音のみ高く相成り水と空と此別も消えて
 天地を一つにたゞさるゝんと思はるゝこの夜
 も眠のたゞに造らまぢるそのにあらずとの
 詩人此言葉の今更ふ思ひ出でられ候
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外
 めでたくあかず夜をふのしく打眺免申候
 元月の夜も十七夜なりしゆ五月の海を出

づら頂小生の宿に世川姉崎大橋熊谷の
 諸氏と共に觀月の不宴を張り申候ひき
 一昨宵の夜九時頃まゝも候ひけん林下
 就らんとしてけさす宮の間より海邊をな
 がめゆれば缺月ながら一間をのぞき海と離れ言
 ふとくろくちやめがたまき景色よみていひ
 かね下女に命じて雨戸をあきかせ欄干
 よりてハイネを朗吟致す其時の心地よき

あはまわれたるまゝ石も金にもなれかしと
思ふれひひまき

貴兄等はさぞかし日々御勉学の事事お
うんとまよまき申存時より御文賜ひひへ
うし病氣も大方お直し候間御心配下
さるまゝ候申上げたまし事山々こまき
ありひつゝもまづこれより筆をとめ候

(樗牛全集)

姉崎嘲風

名は正治
文學博士
東京帝國大學
文科大學教
授。
(二三三)
友
高山樗牛。

二〇 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春
光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故
國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れ
る客巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かな
らず、姿も終には見分かぬまでに消え失せぬ。「健在
なれ」「再び早く相見ん」との別の言葉はなほ耳に響き、
最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗
飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已

に霞の中に入りなき。嗚呼かくて相別れたる我が友今いづくにかある。彼はその夜西の方足柄を過ぎて清見瀉のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星

稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを嘆かしむ。見渡せば有渡の山影かすかにして、袖師の松原雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、總て暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が消魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の

有渡の山
駿河國阿倍郡
久能山の別
稱。
袖師の松原
三保松原の一
部。

如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、
 彼と其の姿と今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊
 に櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜、五年前の
 今日の別離を忍んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の
 流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷
 を遣らん。此の夜、此の風光、空しく思慕の深く、恨の
 長きを加ふるを如何にせん。
 されど徒に憂ふるを已めよ、人に百歳の齡なく、世に
 別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は
 却て懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔

大埋石
 遺文
 思慕
 遣らん

を越えて神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦
 こゝにあり、彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に
 彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜な
 り。形は見えぬど彼は我と語り、我は彼に接し、松風
 濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を同じう
 せる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙とし
 て相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、
 彼と我と長に相伴はん。
 歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれ
 ども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中

遺文
 遺文
 遺文
 遺文

に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜なれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

二 故郷の花

薩摩守忠度
平忠度
(一八〇一—一八二四)
俊成卿
藤原俊成
(七四—一八六)

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎童一人、わが身ともに混ひか甲七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開か

ず。忠度と名のり給へば、落人歸り來れりとしてその内騒ぎ合へり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべきことあつて忠度が参りて候。假令門は開けられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべきことの候と申されたりければ、俊成卿その人ならば苦しかるまじ、開けて入れ申せとて、門をあけて對面ありけり。事の體何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめゆめ疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は

京都の騷國々の亂出て來、剩へ當家の身の上に罷成りて候へば、常に參り寄ることも候はず。君既に帝都を出てさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出て來てその沙汰なく候條、たゞ一身の歎と存じ候。この後、世しづまつて撰集の御沙汰候はゞ、これに候卷物の中にさりぬべき歌候はゞ、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はゞ、遠き御守とこ

そなりまゐらせ候はんずれ」とて、日比詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合より取出でて俊成卿に奉らる。

三位これを開きて見給ひて、かゝる忘形見どもを賜はり候上は、ゆめく、疎略を存ずまじう候。さても只今の御渡りこそ情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へ」と宣へば、薩摩守「屍を野山に曝さば曝せ、浮名を西海の波に流さば流せ、今は憂世に思ひ

前途程遠し
前途程遠、馳
思於雁山之暮
雲、後會期遙、
管、纏於鴻臚
之曉淚。

おくことなし。さらば暇申して。とて馬に打乗り、兜の緒をしめて西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す。と高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいと哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世靜まりて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の巻物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、その身救勤の人なれば名字をばあ

らはされず、故郷花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられたる。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを、

むかしながらの山ざくらかな。

その身朝敵となりぬる上は子細に及ばずといひながら、うらめしかりしことゝもなり。(平家物語)

二二 平重盛論 その一

高山樗牛

小松内府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば、彼は平家第一等の人物といふべか

りき。唯理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少なくとも更に數層の強烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か缺くる所あるを免れず。此の人にして此の弊あり、洵に惜むべし。

四十三年の齡は、重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや彼實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや彼實にその柱石たり。彼の一生は、其の

父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清



平重盛 (京師高都雄神護寺藏)

盛心剛に情強く、眞に一世の豪傑なりしかど、其の事をなすに當りて重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備り、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は嘗に平家

一門の柱石たりしのみならず、又世道の儀表たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛實に其の人傑の第一人なりき。惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は、如何に勇ましかりしよ。彼、武藝に於て人後に落つるものにあらざりき。信賴、平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛をはじめ平家の一族は、寧ろ西國に走りて再舉を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直に都に歸らざりせば、天下の事ほゞ知るべきのみ。此の時に當りて衆論を排して

入京を主張し、大義名分を唱へて士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の戦功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛たり。唯この一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乗じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益、其の高きを加へぬ。今や彼一武人にあらずして朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼を待

攝政
藤原基房。

つて始めて人ありき。其の男資盛、攝政の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讐を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを説破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の舉あらんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしもの亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度かこれがために沮まれて、君國の事ために僅に安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無

きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大極りなかりしが、其の裏面には其の愛子を犠牲とせる慘愴たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛説に歸依して來世を希求せしもの、其の際遇の自ら然らしめしところ。その情や深く憐むべしとせん。

二三 平重盛論 その二

高山樗牛

然れども此の佛説に歸依せる事は、重盛にとりては

寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。此の難關に當りて能く功を擧ぐるもの眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの輕々しく事局を回避して自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、

寧ろ死して其の末路に遭遇せざらんと謂ふにあり。何ぞその願の私情に拘ることの多くして公義に盡すことの少なきや。彼の一身は公私内外の望の由つて繋る所、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば入道が暴横はさながら悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛已に一身を以てこの大局を保持し、居然として

その重きに任ず、何ぞ區々の私情のために逃避すべけんや。重盛その曠世の聰明を以てして如何ぞかばりの理義を辨ぜざらん。辨じて而してなほ之を敢てせざるものは、其の佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。是、重盛にとりて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。其の情や誠に憐むべし、其の行や則ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、則ち

耳順
六十而耳順。

自ら求めて其の家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も齡すてに耳順を越ゆ。其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲すなきこと、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺の賴朝に説ける言に曰く、平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に極れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。

御邊一たび起つて靡かば、天下靡然として従はん」と。
 平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと亦以て想ふ
 べきにあらずや。あはれ、世は如何にもなりなん、唯
 力を盡し忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡
 き身のせん術なからめや。さるを君父を捨て、門下
 を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得
 ぬ。吾人こゝに至りて遂に重盛を辯護する辭を知
 らざるなり。 (樗牛全集)

二四 皇國の姿

國體

八田知紀

いづこにたゞのまゝにすもすみうら
 水や美ら人のすかゝるらむ

友

田安宗武

千鳥すら友よひかほしあそぶなり

なごころ人のひとりたのめ

知己

僧契沖

わがまをさし人あきみの君哉し
 ひともいふまはあうこそ思ふ

八田知紀
 薩摩の歌人。
 (三四九—三五三)

徳川宗武
 將軍吉宗の第
 三子。
 田安家の主。
 (三七九—三四二)

僧契沖
 大阪の國學
 者。
 (一四〇—一三六)

小澤蘆庵
京都の歌人。
(二五二―二五六)

旅

小澤蘆庵

父母の多むなるわまを成おもあらむ

まつらむまのれむをかくるんぬ

立志

野々口隆正

たてそむる志多かりたゆますな

龍のあきとれ珠もかまらず

野々口隆正
石見の歌人。
(二五二―二五五)

元田永孚
儒者。

明治天皇の侍
講。
(二五六―二五九)

二五 經筵進講錄

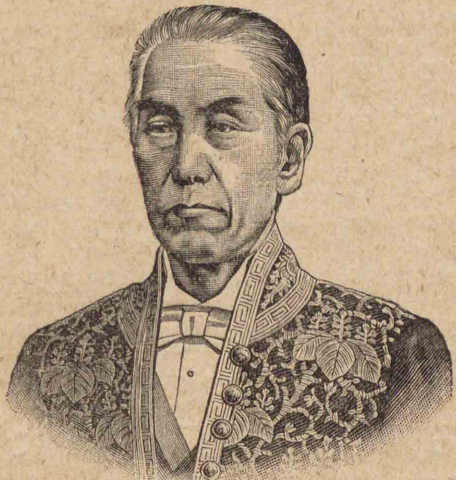
元田永孚

臣謹んで講ず。孔門の諸子みな徳行を務む。顔子

は純粹、其の資高し、聖人を違ること遠からず。其の次は閔子騫、仲弓。然れども、よく孔子の道を受け傳へたるは有子、曾子にして、就中曾子は篤學力行、その工夫最も切實なりとす。「吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳而不習乎」といふものは、其の毎日、猛省痛治するところの實行なり。蓋し曾子は魯鈍の質なるにもかゝらず、其の聖人に親炙して教を受くるや、遂に其の道を傳へて、亞聖の次に列することを得たり。而して、其の自修の要は忠信と傳習とに過ぎず。何ぞ其の簡約にして近切

なるや。

夫、忠信の二字は千古の確言にして、三尺の童子も之を口誦することを知る。而して其の意義に於ては之を體認するもの、蓋し少なし。臣請ふ之を述べん。忠信、之を約言すれば誠と訓ず。之を析言すれば、忠は自ら忠、信は自ら信にして、意義各別なり。蓋し忠信は誠に至る所以にして、誠は忠信の至なり。臣反



(真寫) 孚永田元

誠者天之道也
中庸の語。

思誠者人之道也
孟子の語。

復之を思ひ、謂へらく、忠は己が有らん限を盡して漏さず、義に適當するをいふなり。信は心のありのままを言に出して、隠すことなく、道に違はざるをいふなり。「誠者天之道也。」これ自然にして誠なるなり。「思誠者人之道也。」之を思ふは人の所爲にして忠信をいふなり。誠と信と、其の間あるは天然と

神を大運儀
仁を先忠也
一筆信儀元田永孚

蹟筆孚永田元

人爲とによればなり。其の至るに及んでは一なり。本邦にて惟神の道と云ふは、乃ち天道の誠をいふ。隨神の道と云ふは、乃ち人道の忠信をいふ。苟も惟神・天道の誠に至らんと欲せば、人道の忠信より従事せざるべからず。曾子忠信の説、其の要を得たりといふべし」と。

今、曾子の三省する所を以て、諸を己に體し、人君となりては、吾が民の爲に慈養生息、其の所を得んことを慮るや、或は忠ならざるか、天下に施す所の敕諭、命令、或は政事、法律の表裏支吾ありて、或は信を失はんか、

先王の成憲、前哲の遺訓を傳誦して、或は習熟せざるか、と省み給ふ。人臣となりても、亦各、省みる所あり。斯の如く、君臣相共に日々躬親ら省察力行せば、則ち何ぞ國家生民の治安ならざる事あらんや、何ぞ聖帝賢臣たらざるを患へんや。臣素より陛下の省察力行、祖宗の聖帝明王に愧ぢ給はずして、曾子の自修に明察せらるゝ所あるを信ず。嘗て後宮に侍して之を聞けり。

ひよしへの文見るたびに思ふを、
おめが治むる國はいかにと。

聖躬の深く躬ら省みたまふことかくの如し。苟も此の聖心を存養擴充し給はゞ、唐虞三代も之に超ゆることなし。

臥す龍の岡の志ら雪ふみまけて、

草のひほりを訪ふ人や多れ。

と詠じたまふに至つては、劉備の孔明を求めし心の切なるを希望し給ひて、聖躬賢を求むる誠を以て親ら劉備に比したまふ御心言外に藹然たり。又周の姜后、宣王を諫むる題を賜ひしに、皇后陛下の詠進したまひしは、

身をつみて飾りし花を散らさずば、

朝日のうげも匂はざらまし。

又正心の御題に、

かへりみて心に問はゞ見ゆべを、

よゝしき道にかに惑ふらん。

兩陛下關々和樂の中に相戒め、相懋めたまふ聖心、歌詠の表に溢れて、省察力行の實、天地も感動すべし。之を拜誦する者、誰か感泣奮勵して、亦自ら猛省せざらんや。臣此の章を講ずるに於て、たましく感ずる所あり。故に叨に徳旨を摘發すること此の如し。

冀くは宏度之を聽納したまひて、更にますます力勉
あらせられんことを。(經筵進講錄)

中國文教科書卷六終

文部省檢定 濟
大正四年一月九日

明治三十九年十月十五日印
明治三十九年十一月十五日發
明治三十九年十二月十五日發
明治四十年一月十五日發
明治四十年二月十五日發
明治四十年三月十五日發
明治四十年四月十五日發
明治四十年五月十五日發
明治四十年六月十五日發
明治四十年七月十五日發
明治四十年八月十五日發
明治四十年九月十五日發
明治四十年十月十五日發
明治四十年十一月十五日發
明治四十年十二月十五日發
大正四年一月十五日發
大正四年二月十五日發
大正四年三月十五日發
大正四年四月十五日發
大正四年五月十五日發
大正四年六月十五日發
大正四年七月十五日發
大正四年八月十五日發
大正四年九月十五日發
大正四年十月十五日發
大正四年十一月十五日發
大正四年十二月十五日發



編者 吉田彌平

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一郎

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店

關西專賣所 大阪市東區淡路町四丁目四十二番地 大阪寶文館

中國文教科書卷六
定價金三拾二錢
臨時定價金三拾二錢

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣
切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直ちに御送附可致候

